七度草

字十合

二十廷

18
8
2

303

特
82

戊辰ものがたり第十一篇

慶應四年戊辰五月十三日

○両總合戦のはなし

さるほどに薩長の兵は木更津ふ抑へ〜ゐせたるうへ又真如寺にまもるこがたなめてゐ浪士敗走〜たるゆ〜又真如寺にたむろ〜ゐるいもとより大將もたのき烏合の兵ゐ迚バ衆議いまゞ一定せざるところに大軍のゐせきてるときゝてもうの小勢ふていい勝利抑ぼろのあ〜敵のゐ色こゐぬさたふゞこのこゝゐ身をかく〜て時をまつバ主恩の萬一ゐもむくひ且い國の爲ゐもなふんきゝて一先はなぢを志のんぐ志ゐをたちめんとく

人々用意したるをうふ〳〵官軍の先鋒抑〳〵色
て時の聲をたのぎ たをけまべ ちい敵をとつふるどこを
ひの是 ろるをのも ろりたつべ べわま されにとみをりゆれ
きるこのあるいい追ふせら是 く首をこら彩くをたをを
或い海川にあひ ちめら是 てせんこうをく身をなげを
死をるも ひりををのにも をつ〳〵きい寺ふにぎつりく
かしらをあろ〳〵ふるどろも をかりをなどし を法師ふ
さあをこの〳〵くあちゆ〳〵も官軍たぶちに真如寺
〳〵入りて巡撿をるに洋銃六百挺鎗七本大砲五挺
粮米六百俵陣幕七十張火藥七十箱をくそこに

うちすてあきく人ひとりも ゑえざりきれば
やがてこの品々をば備前の多つぞ分捕したりる
その外金子をくい重寶の品ちれたりの民家な
ひのぢを をるもあり 中にうづめくたちさりし を
あり〳〵 ぎいづ是 もさぎ〳〵 ゆ〳〵て多こに分捕
をくりし〳〵そ ぢたのちこの寺に火をのをりう〳〵
ぎ上總一の大寺なれば夜ひをくをでもきえざり
をるとぞ
九日官軍ハ勝利しそのいきをひ破
竹のゆを〳〵さをるきのの 木更津ふむをのひ〳〵薩

長の兵も備前藤堂と一手にたりていざや是より
久留里ふ如〳〵まをんとく寺の焼跡ふく勢揃せ
〳〵操出けるが其日の午の刻ぞのりふ先鋒ゝ
ゝぞに城外ふいらりまする廈ふ城主黒田筑後守天
兵の抗〻がらきを察し〳〵家老を引連く出迎ひ
路傍ふ平伏〳〵罪を射けるほどよ則たすけおと
く今よりとるふ
皇家ふ勤労すべきのおもむきたゞひに談話〳〵官
兵此夜いとふ一宿せり
十日 兇徒すでに退散〳〵両總の地まろ〳〵鎮

靖ふおもひまれば一先官軍を江戸ふ旋〳〵て衆議
のうへ奥羽の賊徒を征伐せんと家〻の将士各
その用意をぞせらるる中ふも備前の藩士長
光龍藏大森和歌之介ハ真利谷にて分捕〳〵る
品〻を検査く菅野村へたゞひまりふ船ふはこく
十四日の暮方に武藏國高縄手にぞつくよる
十一日きのふけふ薩長大村備前藤堂の兵物ものく
ふ木更津姉崎邊よりふ船にのりて横濱にいたる
戸へかゝりる
さてこのごろ兵燹ふあひたる場所へ官軍より金こく

をほどこしたまひまする船橋（金貳千両八幡（金千
両その外いろく不同の品ごとに小民物ほのふ安堵
しまれば皆踊躍して王師の德を稱しる

○

雜報

前月十九日野州からとりかころにて官軍と會
津の萱野權兵衛なるものに江戸の太鳥圭助の兵と
合戰なりそれより廿五日まで敵味方とにいを

かたりいくつかりきたりひしことをくさ〳〵く
次篇に出べし

○

五月七日清水卯三郎こゝかりこと八去年正月
ふらんすへゆきしがそのまゝようろっぱのくに
ぐにを遊覽してなのめりくかへりしより
うの人のめづらしがるものつゞき出べし

○

九日野州の鎮撫として鍋嶋侯よりこまを陣
ぞくひして出馬ありなとハ紀州の官兵をこの

所の警衛にあらるるとぞ

○

十日支那の上海よりきたりし書信のうちに現今上海ゐる日本人百人の餘といへり蒸氣船を一艘このひし人もあり又一艘ハなほふきたるといへりまた四國九州のなるべし猶その書信のうちにいろくの珍説ありつゞの篇ゐ出すべし

○

信州高遠よりきたりし人のはなしにこの五日ゐ甲府をたちほりしこゞ官軍ゐほくうの處ふたつまりて陣を取るゐるさとびとのつたへにハ尾州侯松代侯沼津侯をはじめとして大名の数十五頭たりといふきたるなるべし實ゐ雲霞ゐごとくなりしと

○

きのふけふの風聞に仙臺ハ米澤ハ朝敵ゐまりたりそのわきのハ仙臺米澤へいりこみくゐる官軍と戦ひ藩士とたゞひゐ不遜なることをなどいろしろ爭端をひらきたてハ劍逆をりちゐてきろしゐふゆにきろしよりのことまりなど

いひたてうされどさいあるまでかまうべ故あることなるべしなるあきうどのいふふい官軍うり朝敵の方ごうりがふと

○

三國嶺の合戦ハこのゆうなるたこのひあひにもようほどあほいうきたりしうとも抑とうるうなりきのふけふ官軍のてあひをたりごいたごーまどにこのたのせうくようこまにきうれをきうほびとなうんこもいひなごと人まるべしーこもいうこれほどのふのであひたる人あきあるをへんまべぞわぶん

なるいうきありしにや

○

江戸呉服橋内牧野駿河守とい人のやしきに生糸蠶種紙改所（番）とつふ場所をこらへく朝五ッ時よりひるの八ッ時まるぐ會計（くわいけい）局の稅吏（ぜいり）あるにはめく檢査（けんさ）しを稅をゆるとぞ金川まもうの所をこらへるるきうり馬のく德川家の陪習（ばいしう）ハのぞれごできるゆとみえうう

妓院の壁書

元是柳営有名士
即今花街遊妓體

君がゝめをもむいのちと志ゝ法西の
まぬるこゝろぎなるちぎりこゝろ〳〵く

ある人いふ此い新吉原松本楼上にてのを考りと

もゝ〳〵ぐさ第十二篇　慶應四戊辰年五月十五日

○

新策

當今日本の急務ハ内乱ををさむるにあり志ゝふざれば
下戈日ハ尋ヶ時ハ此ハ此ハをそれべ彼ハはじまり
國勢窮蹙四民困弊終に萬國ハ對ヶ國體をうしなふ
ふいるべきなり國内其民を統轄するの主あるく人
物のくその私を計國事日に多端ゆく實ハ危急
存亡の秋といふべゝ此時ハ方て君子たる者天下
の為ハ治安の策を建さるべゝ時ハまぎいたゝべと

称し唯一身の為めに天下の事をかへりみざる者
を攻めらるゝことを恐て黙止すべからんや夫國に在り必
政府にありて其威力内に以國民を服するを足れり外
以萬國の侮を禦ぐべきなり此のごとくせんには國内萬民
擘て政府を奉戴せざるべからず政府亦國民を視
こと子の如くすべし則ち永久治安なるを得日本國
中二百八十二の大名各其私を營こと能はざるを恐
て互に相息且政府の力奸譎暴逆を為者を制御する
に足ることを欲ざるに大ならんのみ永世治安を欲ば
其領地兵卒銃砲城郭軍用金穀軍艦等一切兵

事に關渉せるものは咸く集て之を政府の手
に委し全國の用に供し一日を期して新政を行べし
而して一社連名の證書を大名に与へ其納所結
品相應に政府乃金藏より償與べし又政府當務の
役に在て廣諸藩より採用、政府は唯外國に對し日本
國旗の威德を示し貨幣と海陸軍の武力を備へ
所となれば此の如會社を建立し約束を嚴にし各を
して得ところ為しめば大名一も政府に背者
なく國内ますます安靜なるべし何者大名その約
束したるところの者を得ざるに政府あるを

利をべられべきの日本内乱を治の道此を棄て
他なるべし萬民そもそも此道により物のく其
分をまもらい日本の威徳開化隆盛世界に輝こと
愈速なるんと欲然に内乱をまねらばして益分
裂せべ数百年来の弊習を一洗せるもつふ豈容易
なるんや日本人地圖をひらくに其國の極小なるを知
べし大日本の称を以人を欺ことあらばいもんや内
乱にいるうてい外國の人心窃に之を笑めて
日本國のいろまでも日本人の手にあらんとを欲べ
はやく内乱をさきらえ衰弊の風を外國に示し
之をして乖誕の情を逞せしむるとなれ

一千八百六十八年五月　　美國　彎理度謹具

○

ストンウヲルの事

去年日本の使節、美利加にゆきたるに、美國
政府より、鋏裝蒸氣船一艘を買たり、けゞし軍

艦賣買の事は、私ふ和こそ、べのくぐる所なれ
ども、美國日本(い)は、特ふ親睦のためふ、曾く許
たることなるに、其船は、當時世界第一の堅艦ふ
して、昔日美國内乱の世ろ、南部のあふ佛蘭
西にく、製作したるものなり、さるに南部力
法紀乱平にいり、此船まと政府の有とるり、
其積高は一千四百噸ふして、蒸氣械四具、六百五
十馬力、驅船子二個、柁二個なり、ラム敵船を衝突する具の名
長三十三尺にして、水下八尺のところふなり、蒸
氣のちからをさのんふして敵船をのぞんで、

馳突すれば、之を沈覆すべきなり、鋼板なの厚さ五
イーンチ半なるものをもつて包裝せるる、水下七尺
の處にいる、船側ふ厚三尺にして、うちに
向て斜ふかるれる敵の砲丸ふ中とりつども、霰雹
の屋上に轉展して、檐端ふ和つるごとく、穿
洞をべのくば、そなるる所の砲三門あり、一は三百斤の
加農、其二は共ふ七十五斤なり、
右船の價は、五十万元程なり、ハワイ近い美國の旗を
建てきるるりハワイにて、ちどめて、日本の旗を揚
たり、さるるふ元來此船を和ふ時、石炭など用意

の品ハ、さこ〜も掛合ざるをりゝを、此ところより日本
にいるゝまゝ、入用の石炭を買ざるべからざる、ハワイ
政府これを聞く、日本政府へその赤心をたゝゝく、
金を貸石炭を買て、日本まゝ帰着こゝを得せしむ、
是に於て、船将ブライウイン終に無難ゝ日本へ到着し、
下錨〜たり、さるに日本内乱たるをもつて、美國
ミニストル中立不偏の法をまもり、その蒸氣船を政府江
わたすことを欲せず、たゝちゝゝゝ命じて日本の旗
を脱く、美國の旗を揚しめたり、今此ストートンウヲル船
を日本へわたすべ、之を得ん者、かゝらざるべく其敵の

諸船を沈覆するを得べきなり、
當時新約國邉ゝて、モヌストル砲（強力の砲といの義）を製作せ、長
二十二尺半、腔孔二十インチ、砲の横径五尺四インチ
美國七年の内乱既ゝをさまりて、二十七の鋏装軍艦有
といへども、政府これを用ることなし、故ゝこゝ
これを買却〜〜國債を償と欲すと云、

戊辰五月　横濱九十三番ヴエンリード誌

○大鳥圭介らのごろ日光邊ふく數度合戰せしが
いろ〳〵勝利のよし風聞ありし四五日前ふ宇都宮より
来し書信の中に今月十九日廿日とうちつゞき今市と
大澤の間ふく合戰ありて江戸脱走の兵三百人計と
彦根土州の兵七百人とのたゝかひふかさゝろ五分〳〵
のいきにて勝敗なくひきとられ十九日翌廿一日官軍
方人數をはゝして千人ばかりあく取てうへいこゝろ
關東方にても早ゝのことを察し山間ふ伏兵を設
置く敵を前後より挾擊にいしいあ官軍四百餘人
討死いとしいよし且又奥州白河ふても合戰有之ハ

白河侯ハ棚倉へ出奔いたされいよし風聞ありし
いとしの太鳥のたゝかひふかも高原越よりいでて
日光近邊ときゝあり

○前月二十一二日ごろ三國嶺にて官軍の斥候隊と
江戸浪人と合戰ありしが官軍方勝利のよし

○天皇浪華より還幸ありてせうしい德川前内府
の寛罪を白さんこがゝめたりとある人のものがたり

ひとちはたらたる人とゝみてつくりたる
たるこのすゝとうちまかくてつくちるの　作良
うゝはうこひしき君がたのうりを
うちのくふ（せこのうりる人よせ翁まを
うこのれるとゝたゝてつのくりる
ちゝうたのいをきうりうゝてあぢ世ば
うりてきぬべきまゝくをぞきうゝ

偶成

ぬきうりたるとうゝびゝ毛せるもしほぐさ
かきこのめちいたゝ陸つとゝ世ん

めしほぐさ第十三篇

奥州ふりきうし人のとめごろ　五月晦日

閏四月のはじめごろ會津侯（仙臺このゝいふく
かきやひしゝグ會津のきうすゝいこま）までもたる
領地を半分ぞのり天朝（さゝしたのまゝせうそま）ぞ
だこのんゝゝぐきうのまゝとゝのに仙臺でやゝゝそれ
でいきくきゝ今少しぬぐしゝたのさま）バ某ゝのきに
とりたてのゝゝひませうといへども會津の家臣ども
不兼知ゝくこの相談ゝこゝのそばさゝうたのゝばらゝ
正月ゝ伏水で先鋒をしゝて一番砲をうちしゝの

二三人の首をきりて持ゞ〜なきまさうすれば某
ようにたのゝひませうといふ會津のこたへ
ほの時のめめどもいきをうちゞにをしを今えとりこと
をゝゝと仙臺でまこといふいその人がゐるあいたならば
家老重役の人の首を持ゞ〜なきまこの時勢に及
て因循なることでいけません君をづこのしめらるれば
臣〜するいあらうまへのことまでいひたるにまこ
會津の云をもちろんのことまでいひたるにまこ
をりいとこいふ仙臺の使者やこいふやうは國中のこゝば
死を抑決〜なきまこいほどめるゆ なきゝば家老の三

人ぐらゐ抑ころ〜なきまこれてもよさけうあるとと
さくたびくぐ抑〜へ〜しく議論〜〜くさくく
仙臺のいふこほりにたらうと會津でも決着〜る
ゆえその抑こもれあく仙臺の使者田崎土佐い仙
臺へかゝる軍事總督九條殿へ中上るいこの奥州を
農業うゝ養蠶をおゝにいゝ〜ゐ處ゐて今農事
にゝこのこまこかゝこのいそぐ〜紀をうゝにゆへば
戰爭ごはじまりますれば百姓のなんぎふなり國
産のゞゆまにゝなりて上下こゝゝまることにてゆ
且ハ又會津ゝこのなるふ〜みにくそさうふ砲發

をいて主人源慶喜を朝敵ふ扱ひ候ま
またく容保がせちどにくゆらく罪を謝し
ゆ間なふとで會津をもやはくまもりて扱ひ
てくださりまし扱のしらの慶喜さへも非常に寛
典ふ處せらるしほどのことなるべその臣の會津
だのりを扱ひ申しなされぬといふわきもなくまに
まふなどやあげたるに九條殿もめでたもめるり
たくいらさい扱わにあなさるおぼしめしの處■■
にて不兼知なる扱のむれなれども軍中のことも總
督の權ふく扱さぐわにありてもくたりしのふぬの趣

かねその勅定なるべこのまふことい為のとて仙臺ふて
いづし扱紀ふる兵を同月十二三日ふり圍を解て
この〳〵わりをまふりまへふ仙と會と二三度ふたくのひ
しこてふにれどもめとより私怨にあらねべふひふ
敵ふる扱のそべなそのまほりをしたりとそ扱まま
ふ奥羽の諸侯ふふ致して兵を扱ことと
を扱とひいれふりそのわきハ會津の荷檐をとろ
にもあらべ徳川家の左祖をとるるもならべたべ
上洛して　主上へ奏聞したいことがあるゆゑ
なりされどとすでに乱世とあるる時節柄なれば

兵仗いたれくゆのみべきぬそのうけい恐まを
きるやつこがあるべきりきちふッてうほるつりて少恐
なりその奏聞したいとつふわきいこのねて萬民の困
苦をきくらせうまふその元御仁恵の
叡慮のありむきおふるふいたびく　抑毛いぐきれ
たれども乱ふ乗じて■と称する暴人ども諸國へ
乱入して無罪の小民を殺戮して合戦うて家
産をうしなひ親をやれうさるる妻子にうきのる
なるきるるものも抑ほく何業によりこまるぬもの
ありて萬民を土炭ふうめたまふふてうけて

の抑ふるるうちこのふなりうれい抑ほのうまとの
主上のあがるめるいあるまりきなりりこれが
天皇の抑ほるるをうくて外の人ごのたぐ私の
うらみを報ずるうめにうんなくぐうないことをして
いまことに國のためふたうぬることなりうのうけをうく
よく奏聞ヤたぎて
主上のまことの抑ぼるめるを萬民ふたうる世萬民
ハたりぐうれ　皇化ふ沐浴して太平の御代就
たのしませうやうにしたいうものぞそれいなんでも
勅諚でいくさをやるぐ一ぞん　よのらうとて米澤仙臺

會津の三侯とその外の諸侯あつまりて評議せ
さるべきたるべしそれより上洛のさたい野州まで御し
いるべしそれいくりさかくをちかくいるさのやま
ねべ百姓もこまるほうずもこまる
職人もこまる
やまぶしもやくしやもげいしやもこまる高人がいち
だんこまるアこまッさのもの太平よし
てんぐさい まし

○京地よりきさうし人のちなし

京の東山ふ物きぬとい歌妓ありきりその藝いふ
ものでもなく上手なりまもなくうれうさをもよく

よこきりしこの物きるこうし時まづしくく
ひとりの物やをやしなひねてなりしほとふちれ
あるりふすこるひとふ藤七といふをとこなりきり
りとりかねとちにるたりざ邑でもこの物きぬこの
物やふ孝行なるをあつられこをりくうねきのくひ
そのたりどをこちりたくあどしたりるほどにこし
をそでくそのの物やしふきりさて物きぬい此藤七が
法ほにならんこく初そのにゆくすのちだりを結て
月日のすこるをたのこふ妓女ふなりて世をわこり
きりこのころ九州ごさめ武士にく度このいきまる

高名したるものどもとこのいへる人の物きぬがうめ
るをふほまとて物ほくのうねをもをしまづ法このひ
そとてくさまぐふくどもれどもこの物きぬきろざり
ものまがこれほどにこころをつくすふなにもあるらん
こうくせんさくしたりるまばらの藤七あることをさとり
てやがてその夜このち武士ゑそのに藤七をこらし
にまり物きぬがこころ物りひるべしさてなるひめ
こそのまちのまにこのち武士まこさるるこにきろり
て物きぬとよびて三味線のせらるるせなどしてつね
のごとくのそびにまり物きぬをうらみるるほを

こせびなるふぎまたてにちらひけらじて此武士ゑ
さけ物ほくのませくいろもうなまくしくりて法
つこはとそだにまりそひたりるを武士ハ物きぬを
こりて彩色にきり物きぬこの武士をこにほ
たほしてうんのりくてぞく帯のあひだよ
短刀をこりいぐしてさろでふりよとえしこの武士
のむなつにつこれこほるばこりふつにてにりさて
なん太音ふくいひまるいいつうまや首尾ふく夫の
かこれをうちとあしぞこくやがくその武士のこるを
ぬきこびをきりてうちさりしが藤七がこのに持行て

先年おきあきぬし自害したりしるしたるこの中の
かくりごきとぞたりにる辞世のうたとて
ゆくれぬをなどのんよりいしぐのやま
さくらぐのこのはもことにうえなん

○雑報

このごろふらんすの大軍艦七隻よこすかにきたり
て錨泊せりなほのゆえともはつきりがたしといへども定て
ふのきうちあるべしとうわさいたす

六月二日

閏四月六日、歩兵頭、松濤權之丞人、上總の姉崎
にて、暴人ふころさるる人の目、この人の取締と
いふ役ふたりて両總の邊ふ屯集したる脱走人をハ
百姓一揆の取鎮などに力をつくしたるがそのころ脱
走の兵士にまぎれこのさたふ滞留したるものきこえ
たりるまべ追討のためふ、官軍物ものく進發ありる趣を
松濤きこをきて、いそぐ脱走兵の隊長よりひて源内府
公、恭順の深意を説諭し、妄ふ凶器を動すべからざるの
理を説しふ、誰料この脱走人の中ふ、疏漏の頑物たりて、

松濤をうてがひくうまいハ官軍ふ通せ〜たふんとそ
其夜ひそのに宿所ふまねきよせ不意ふ鉄砲をうち
のまかくそのをぬいて左右ようきりころしたり、誠に
かくいきうまるとたり、この人いまた人みな世ふ益ある
ぶきとのたるべ〜と人くもおりひたのこるをかく
むごくためにあひて忠義のこころふ非命の死
をとぐ〜いくちを〜ことたりその所のむくひ
に松濤ご首をぶさ〜ぶき〜ぶきるが抜た夜たま人の
ようさうち〜とそ日本いまぐかる東狄の風あること
をまぬのまざること抜ほ〜すこ〜のたくそひふく

人をぶちころ〜まるこころさまたるとたの子弟ハ
そのこのこたうちとくたをもたるき妻子ものころす
ことたり又あるたいうくふもあれようろぶ人を
あふ〜まるやこよふたあ〜ぶりなどひみををる
こそのぞりあるくさむ〜ひのこころぶふ人をきること
あをるのごと〜いのちをすをることあくるのごと〜など
いくりこるみのこのきまくにふ人をころ〜をふを
ひのをとり文明なる國いさるよこ〜まぶきるべ〜

○

江戸いはるをぶけいきふたりて まふのたきまひに

まうでひまありさるわこの町の志ぞるハ三座を「狂言ぐ
して来ることふなりしゐ俳優が和ほすぐれて来ると
ゝえて中より下のやくしやいろせ」でも志ぞる〈でも
出てもかまわぬとさぐまりしこそわとハこの三座の俳優
いろせゝ志ぞる〈出まぐ位ごのさぐるまりあくそのまるま
をちづけことなりしごの御一新のちこのらなれでこれ
もかるるまあるまるべし

○

九日の夜ぷろしやのふねハ大風雨まそうちちゝきれり
これい兵器をつきて北方奥羽のらふ〈うまにゆゝんと

せ〜ぐがかく〜ゝ〜ゝるハ王師ハ敵なきの祥なるべし

○

支那の呉淞といふ江のほとりに滬とふ處ありそこふ
魏韻林といふ人ありなるぐ五月七日その人より日本乃
岸國華といふ人のもと〈書信を送まり其うちに云
このころ上海港ふく〜日本長州の徳山氏なるひとふ
ひとりの英才博識の高士なりその人恭西の學に
志ありて近うちふ輪船ふ搭く英國ふ去く師を
撰で事といくり、又豫州宇和島の人ふきられり是
亦勇壮豪邁の士なり火輪船一艘を買去まりその

價洋銀十萬元といへり今又日本人数十人あり
日々上海城邊を遊玩せり現ふ黄埔の某氏ふ寓在
せりと聞曾て日本ふありし時ある賊軍とたゝかふて
輪船の汽氣機械を損せし故ふ今これを修理せん
ぶためふ来りとぞ顔抹名い韶別號い白鶴山人
といへり高名なる画人ふく梅と美人とふ最その妙を
得たり胡公壽張子祥孫仁圃張斯桂李治梅など
と朋友なり

○

駿州沼津にて合戦なりしふふぶんあれども
くちしことをきこのびさきこゝろ甲斐の黒駒村ふ和き
し林昌などの徒の物らしたることなる爲ふこゝ
物りへどこのらびこのつびにたゝのひのありさまをよく
ふらべく志るべし

○

この七八年前ふまたまにきこりしいぎりすの志ふ
すとるをふぶしといへる賢人こゝふいへべきほどの
人なり名いこれたる迷ぶいぎりすふ第二度目に
きこりしこゝすとるをありその人この節いまこゝすの

政事の氣ふつゝぬとそ　のゝ人のくらしさるこゝろ
ふ田畑あまるこのひと百姓ふなりてゝをらくにくらし
をまりそれに日本人五人ありてこゝにかをびをるとゝ
ゝなるふゝをこゝをありこゝさそゝまあるこゝ日本に
たとへば寧樂の御代以前のやうなりし支那なをば堯舜
の世なるべし世界にあゝるのほどのよき國はなし政
事文物ひとゝしそなるふさるこゝとあり

○

ある人の説ふなるこゝは港ハ商法まことにふくゝとなひて
土商客商とゝふふゝとびあくり參謀大熊氏ハ鍋島の
人なり博識英才なる時勢をさゝし急務をあげ邪
正を糺し仁慈をほどこせり支那ハいふ〳〵ゝり日本と
和親の國なれば別段ふゝきりあるのひをなせりこれ
にゝりて唐商ゝ
朝廷の恩ほしめしを感戴し舊弊のあゝたまりをを
ふゝとびをるとゝ
○兵庫ハいまゝゝとらしくをなゝば外國人ハ
日本人の家をこゝりてをまひせりたゝいぎりすこんしるのゝ
家をたゝゝり

そこの江のなるふこ〳〵といふる人の隨筆の内より

ぬけ虫〳〵たるもの〳〵

此世界の東のそてふ扶桑木とて寂大なる木あり七八百年以來この木ふ虫がついてくらひあらしてほとんど枯なんとす始いろくしき赤色の虫ようつくまそこ紀ふちろ紀あるうの枝葉をくひをしが又白き虫二三いできて赤虫とこのこあひつゐふ赤虫をくひころ〳〵て東ふさ〳〵いでこる大枝ふとゐりて葉ごるくふうちふ赤虫の種もあちこちふ残居りんこれ〳〵そこと這まわりてくひ又い白虫とかこあひまどしりかくて年經るほどふ黒虫青虫黄虫などさゐぐくめむ〳〵いできて夜昏となくめりめりとくひあしくゑみあひあらじて騒立ほとふ此木の主ゐ者ゆ其勢ふ抑られて世のもるゆ此木をぞくひとられんとて口惜きとこ抑りくどせんもぞ法さるほどふ虫いあまるこの子をうこつきゐ又外ゐりくるもありてのふくふるくもありてちのさ紀や大なるやいろくのきこもぎなる虫うぎくとむ迄ゐてくふゐごふいと大なる木なれと虫ゐ紀所ゐ。のふさりゐる此木の主いこそこのむども追拂てんとそこちさうぎ〳〵ふとも力不及〳〵てやこぬ夫ようぞ虫いなほふえふゐるかくてとゝへくのもあちこちふ大なる虫いでくふ小むどゐをくひとろ〳〵ぬ又そ迄ようも大なるがひとろいできてその虫どもと爭ひあふほどふ又大なる虫いできうてえむこのふむ〳〵とゐ そこそこをくひとろ〳〵ぬ此虫ハ外の

木の葉をぞくひあらしたる此大虫死るあとゝ今ひとつの虫あり
るゞ毋うくくひふとりてこれぞこの扶桑木をゞ枯のこのゝこの
にして木のぬ〜まゝすち〜だりの枝をあゝ枯れて已がちるゝある
こゝ〜まゝふい虫どゝ数ゝ〜ゞ枯る虫どゝに枝どゝそれくゝ
そのまゝあゝて枯の色いひむぞ〜ふさ〜いぞるいとあほ死る枝
ふすぼりてもみりさてそのむ〜どゝ子あゝさうゝつぐゝ
るほどふとゝくふちびりてこの木ふすぼりもなくたり
ぬくゝる沼るとゝたゞくひにくひあゞ〜れゞさ〜ゝ
枯ひなる木まれどめのいづるひまゝ〜ゝくいゝれゝ
ちんとゝ

めゝ〜ゞぎ第十五篇　六月四日

○閏四月廿九日甲府からの書信の抜書

當月十八日遊撃隊箱根二百人ほど葦山より三坂
峠通黒駒村へむきのまゝ〜隊長伊庭八郎佐久間
兵二郎人見鑄太郎岡田斧吉のゝ〜いづれゝ壮年にて
ていゝくゝ枯ぞゝのにこれありこぎゝくゝこまむぶい石和付
く付同所へ注進これなりゝ御城代沼津人数いのちゝん
掛川中津ゝ人数そまゝくくゝいぞ〜當節ゝあゝあひ
さのちゝゝ勤番方にゝ出張のこゝゝ江戸枯のようゝ
ひきのゞ〜とゝ〜ゝ水沢文助石坂周藏両度ゝゝ

大總督府ゟ駿府田安殿　御沙汰の趣申聞
そむく　説得いたし　ゆへ　ごとくふぶん　義伏されなく
遊撃隊　願意ハ人倫のもちをたがへ　尾州ゟ
彦根へうけあひとして　まつこと　まこと
いづれも甲府表寺院ふ　抑ゟ　謹慎いたこのうへの
御沙汰相待　出立いたしたくもの中ゟ　御城代に
抑ゟ御聞届にあひなり　今晩この明日いこのたのふぶ
まこのうち　ゆへん　昨廿七日夜駿州路ゟ人数百
人ほどかごのさいより　市川大門村ごろり　黒駒村へ
もの中のうち　右ハ本多美濃守家来のよしに

ゆへぶとたのひとこのふぶ　者のと探索のところ　駿府勤
番方並与力のよう　妻子ハめこふぶ　ゟ　清水
濱より乗船いたし　出府と　狩ゟ　ふひ　ふうふん　こと
ありハ　ゟ　ゟ　ゟ　屯集人数にさしくらへハ趣くハ
同村ふハ林昌之助　出張の抑ゟ　ゟ人ハ肥後守
殿の子息のよう　信州路ゟハ尾州の甲宮如雲松
代諏訪高遠美濃高須岩村等の人数抑ひくふ
いろこと　今晩韮崎宿泊りこのうへなにゟのうの
さまとあひなりハや　弥覚悟の一段とハあひなり中ハ
兵粮焚出　そのほうにく上下えんざいたし　戦地

模様い次便ゆ可申上ゆ云云

○京大坂雑報

イキリスのことぶにもいつこほり好消息いたるを
なきことをいふごとく當時京阪ともはるゞ穏なり
近日大坂にく内外新聞といふる新聞紙でゝて七日
目ごとに一篇づゝ出板せるゝ〜このうち奇聞あれば
抜つくゝことがめ〜ほぐさにのせくさうそく出板すべ〜

雑説篇

○ハシントン人名之逸事

ハシントンハ、アメリカの人なり、文武兼備の才ありて
幼年のころより義氣あり、かりそめにも偽なく、又
驕奢の風なく、篤實なるうまれつきなり、アメリカ
人のまにいるるまでなほその人となりを志ひ、尊
敬せざるものなし、余ことにハシントンの幼年のころの
行状をあぎり、小児等をして善事をさしめんとす』
さてハシントンこどもの六才のとき、友達あり、ちひさき斧
一本を抜く毛、ハシントンこのまきてうをりらひく、大に
ふろこび、のちあるとき、りてあそび、木や板をたきわり
なとして、あそびしいこどもとぐらん世なき氣性たい
てい抜たのゞことなり、まさそのゝのふいに桜の木一本

ありし、はるもとぎ大なる桜子を生ぜるゆゑ、そのち
りとるちんちゆうせしが、ある日ハシントンこのまさこのり
をたづさへ庭ふたちより、さくらの木をことごとくきり
たをしつるが、次の日其父ふにいり、桜木をみる
ふ、枝も幹もことごとくこまりたをされば、
如何ほいふいかなる家内をよびこの桜の木をこの
平日愛するこころ、高金かくうひらきのこれといふ人あり
てふ、うらぶるほどひきうせしを、かく悪人ふきりこを
さまるこそうちをしこれ此悪事をたのむ人
をたづねいづこ、このうらをもらさんとぞのもらるる

家内い如どろれくこそなる志ふぎるとひて、この道ふれ
ひらさふ間ふ、ハシントン、外よりかつて、手ふ小斧を
ひもたり、父をいつくく吾兒桜木を斫しものを
志ふぎるやとりんば、ハシントン父のいのりのはるぶし
く家内のりもの志らくせしなりさををうて、初の
ほどハ一言もいもざりしが、志ばらくしていふ、わるし
の偽をやませぬことハ、ちうんのごぞんじなれば、この
きこふ木ハわるこの斧にくきりをりきしさとその
父この言をきくやいなや、たちまちいこりをひるがへし
てよろこびとなり、滿面ふ笑をふくていふく吾子の

偽言をいうざるいうぶいくの面目大幸これふまぎれず
たとへさくらの花白銀となり、その實こがねとなる
ごとく、ふるまさる珍重せべきぞ

○

北アメリカ、カロリナ地名のうち、サンテー、といふ河のあるう
に生ずるまたまうぐめづらしき草あり、よく蠅をとらふ、
故ふその名を蠅取草とぐく、その葉のうへふ長き
毛茸あり蠅その毛に觸るとたちまち、ぢきに葉を両
方ふとりふさぎ、たくみうちくあひだ、いきつくりとまぶ、
斃死たるちぶんふ、そのうちくそのをひらきまた

他の蠅ふとびきたるをまつ、
此ふくさはまうぐ異なるこれ前条にいふ所の、カロリナ、
のサンテー、河あるうなぶぐい決て地球の中他の所に
生ずることをえべ

蠅取草圖（フユヲス、フライトレップ）

○含羞草いその葉ふさらるこゝ紀いぢきにもそこられくきを歛て感覚あることなし合も動物のごとく初て見る人いまちらごめづらしく紀と押のふべきに前条のもくこりごきいふく生物をころして食物とまることもとも希有の植物なりこのくきについて別ふ新聞でもなきれども今こてに図記して皃女ふ地球の大なること造化の奇なること實ふもとの言るべのらざることを言ふしむ

○五月十七日出十八日着従江戸来信の寫

前文略之○十四日夜ふ入なふ市中そうぐしく上野彰義隊ふ各町名主へ觸出し今夜上野ふて戦爭可有之早速町内人呂さ出し不觸有之人くさらぐもちれ然處翌明方俄ふ喇叭太鼓の音きこえ引續き砲声ひきわうこゝに人奔りさらぐ音きこえ五時頃最早上野周圍に七箇処火の人ちらく砲声きこひく外の方老若男女半び逃るこのの扣びぶしくとに先頃ふの久雨ふて溝水あふれ出て泥濘足を没し往来困難ふくそのありさる實ふ修然之至ふ対し九半時ごろ中堂炎上相始り火焔空をやく砲声ちるやさらきびく七時ごろ砲声やうく少く遠の紀人心一先案堵仕ゆさりなるがら双方勝敗いまだころふ

區々の取沙汰に及ぶ。処彰義隊敗北官軍方いよ〳〵勝利とあひきわまりぬれば七時中堂やぐら抛ち猶又砲声時々相聞ゆ夜ふ入て段々物静かあひなりぬれば何事ぞ紛冗中鳥渡申上ぶいまだ後便に申上ぶ

五月十七日

追啓一昨朝より筋違橋昌平橋両國橋浅草見附柳橋新大橋永代橋〳〵出張〳〵大川ぞ〳〵いづこぞ〳〵あらぶしぞ〳〵今戸ぞ〳〵山谷ぞ〳〵千住口等の処官軍方日夜看守ぶらいのものをきび〳〵せんさく、あひなりぬるぶ〳〵ぶ

六月五日

第十六篇

○近日雑報

アメリカ人一橋公（前の大君の事を称し奉るなり）の大權を御門（被奉帰）なりと聞しぶ公を評しる文を得ぶ、左のごとし

一橋公の職を辞しぶるを、きゝて嘆賞せり、實にこの公は大に人ふぶるの度量ありたまふこと、これを以て知るべきなり、萬民の血を鋒鏑に塗るをこのまず、大權を棄るを、弊屣をぶるが如し、今親睦ぶる所の外國政府を引て以て、自援とするを得る權あり、此の如くせば勝算疑べきなきに、却ぶこれを為さず、全國平安の為に、

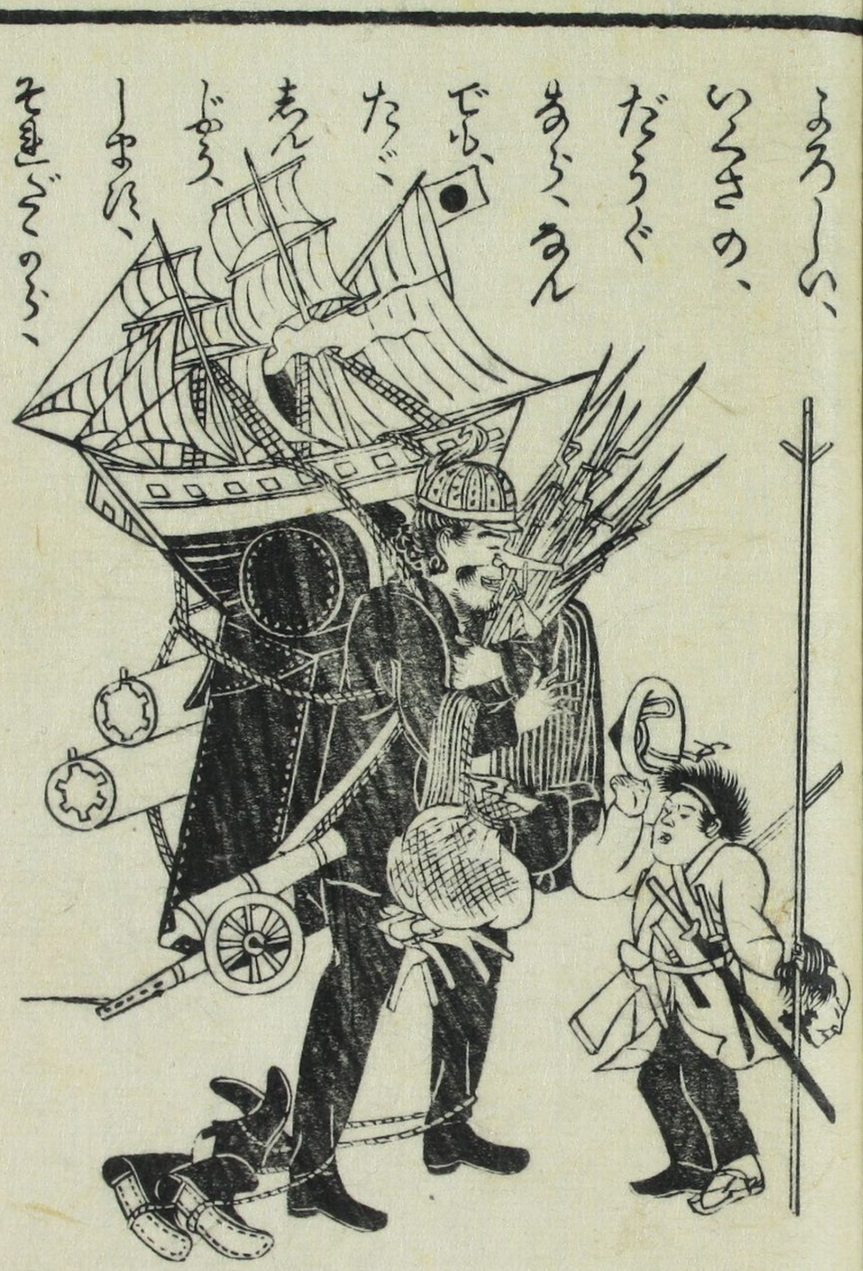
自らふ数百年來の大權を捨て、少しも己れの為にせず、當時敵も味方も其德行を嘆美せざるいなし、とぞ宜なる哉、卓識太度優に萬人の上に出るものにあらざるべし、此の如くなること能はざるなり

○余大坂へ行る留守の間に、發兌たる、新聞紙の内草の中に、當時江戸詰の御大名衆のあふさりとなることを書載るこを、兼りたり、凡そ國に内乱ある時、雙方共種この浮説あることのなれば、其報告の信偽辨ぜること、急てもあらぬ筈のことなりとは、余ご主意い確説實事なるべしのせざるつりなり、余留守中他人ゑ任るより妄誕虚言の譏責を招ぎり、以來い一日意を用イ詮無内乱の火ゑ薪を加える類のことなきべし、國内一和太平の基と成べきことを挙て、諸人に示さんと欲す、蓋し方今日本の形勢い門前に肉を窺ふ盗賊ある家の如し、家内一致して用心せざるべ彼賊直ゑ其虚に乘せんとべ、然るに家内自ら混乱せば、豈ふくその家を守るを得んや、一政府を立て外國人とあすく親睦を厚くせずんバ日本い將ゑ大なる不幸に及ぶんとは、衆人宵〻早くこれを悟らば、大ようてい萬國の人民と相和し小にしてい國内強國の民人と相和せんゑ、是余の素より希望する所なり

美國九十三番　ウエリード謹志

○神戸よりきろ〜ちんどめ〜う〜

○物ちゃう、このとわ、わひとそうます、そして、らくさ、
ちます、うちます、△どもとも、とまく、よろ〜い、あのね、
わるくし、いくさの、だうぐ、いろく、あります、らります
なら、あぎうませう、○そろ〜、ごらんの、とわう、ちと
ちと、めろて、ねます、れ、ごもさぐく、らくさ、ちます、うう
なに、ちるでも、ほしう、あるまり、ちこ〜、あまり、らくさ
の、ことで、うね、つのひ、ます、そして、びんぐう、まりほさ、
そして、だいきん、ちぐ、ひまた、ことで、ます、そろ〜、
はるちぐ、とまうまる、△いく、ちる、うまちひます、でし



よろ〜い、
いくさの、
だうぐ
あるう、ちん
でも、
たぐ、
ちん
ぐう、
しまる、
そまぐ、

みまこの、かこにも、きこの、このこゆも、いこき、ここい、
ひと、いちふんも、いまく、ありまに、まで、いくねん、まで、
でも、いくき、やあません、よろこい○ありごこう、きこ〜、
このも、ここひ、ませんめこと、はるろご、ぬきのごく、あり
ます、△なこのくごういこまして、すこ〜も、きのごく、あり
ません、この、こぎこの、ひぢに、こきて、ありまに、ふころごの
ごるや、いちぶや、にぶきんで、ありまに、にのこと、いりまう、
たこふ、こるく、きんしまう、きませう、きこの〜ここしの、
うぶッて、ぬます、のの、ごけい、どあんご○あひろぶこく
さん、ごきんせつ、まことに、ありごこう、にのます、どうで、

にのこと、せ物ごう、そこて、こきんごう、このこう、ひきづう
たう、こて、ぬます、きろもの、こなく、ここて〜、ひらひ
ませう、わこて〜、たんと、ふろとびます、そこて、たんと、
物まい、ちちで、ごこう、まう〜、このぎまに、とれうぶ、いよく、
ほひこまます、そこて、みまこと、きこの、いこきごと、こまく、
たく、まるまで、こひも、こるく、なくまるまで、ここて〜の、
いのちも、たく、まるまで、ぬどく、いこき、いこ〜ませう、△ごあッ
ここごあッこも、あのね、そこて、いちもん、あこで、よにいごね
あの、ふどの、やまと、そこて、まこのご、あわきな、きまぐ
ふこつ、ころ、いろふ、さこのふ、○ころまこのち、こころの、

うちで、きて、あのひとの、うつくしい、づきんを、ふでの、ゆな
の、あるまへ、うぶせるのう、きらん、きらい、

○

佛朗西ふい百廿三艘の帆船と、三百四十四艘の蒸氣船有
蒸氣船の中四十四艘ハ鍊張船、右船この大砲總て六千七
百八十四門あり、きのれども英吉利、普魯西、魯西亞以太利
も亦皆相競ふて海陸軍を盛にしられば、佛朗西獨強國
と称をべのらば、但美國ハ獨り其軍船の過多なるを悟れり
○墺地利も亦陸軍をまし、年齡二十才ゐを三十四才まで
十四ケ年の間、國の爲に賦役ふあるるゆゑて、歐共侵寇

のられひなるに方て、九年十八より四十までの者皆役ふ下る
べし、ゆゑふ國中の人ゐる兵ゐして、代人を出し、自ら免ることを
能はず、佛朗西普魯西も亦ゐる此の如くす、あゝ此の如き惡
政を行ふ國こそ最早久しく太平をたのむことを得ざるべし
○昨年ハ世界萬國天氣季候はるるぐなしく、イクリヤ國
の、ウエスウエヨス、とふふ處、南アメリカ及び、ハワイ島ふ大ぢん
なり、火山噴發して、ラフハ石抜びぐぐしく流出したりハワイ
ふ其最烈しきものなり、ハワイ中の一島ふ大サ日本の富士山
ほどの山三座あり、その一ハ火山にして、マノロアとふふ、曾て十
三年以前に十三ケ月の間燃ラフハをふたぐして溝繫

充ち、三百里方の地面ふ溢流せしめり、今年三月ふ右の火山ふたゝび逆發し、ラフ火の河をなして、海中まで流出し、其勢西洋一時の間に、六十里を行く速なりし、是に於て海うまること五十尺、海岸の廈屋にまとそんし命をうしなふもの百人ふ及べり、其後ラフの流出をゆいて、もとも險難のことなれふ、斯世界中天氣季候はなはだと異にして火山噴發をもて、富士山も亦あるいは再發して燃え、江戸の市中までも灰塵のふるやうのことなるべしと物をもとる

○西洋紀元千八百六十八年第三月廿四日即ち今、戊辰年

四月四日フランス國巴黎ふおゐて羅尼といふ人をもつてよのうたきと外題せる新聞紙を刊行せり、そも日本のひらがなをもて書き、日本人直ふよゝえらるべきやうにうきたのらせるものなり、この羅尼といふ人い、支那印度おゐび東方諸國の言語文字につうじ、そもふ日本語を能も且つその人となり西國ふ生長しものゆゑ、東方諸國のふうぞく、おんぎやうのおもつぼくなることを愛せりと、又その著述に日本佛朗西對譯字書等あり、もでにパリスふおゐて刊行せり、この人いまゝいちどゝ日本ふ渡來せゞゝて、かく日本語ふつうだうせるいきつに賞譽ふうけたり今茲よのうたさ初篇

山の数条をその原文のまゝぬきぶゝて、あまねく世上ふ
流布し、志ゝゝんの聞見をひろめちゆくゝゝあびふ和をむん
ことをこれまゝぐゝこのたちんぶんを剽竊して、已のたんぶんと
充るにあらゝば、彼書萬里の海外まて刊行せるゆゑに、
いちゝくゝゝたゝゝるゝゝめたゝゝこのらぎるをあり且四維尼
のゝたゝらぐそをも日本人ふ志らしめんとゝ、こゝ迄わが
婆心まり、ゝる人ゝのゝゝろを領解せゝば、吾たいゝうゝれふ
ゝぐゝば

めゝゝぐさ第十七篇

六月十日

○東海道總督參謀より

大總督府參謀江贈る書牘の寫

賊徒元來之奸意も有之欲追落之後ハ、日光辺江
相集ゆ由之處、先為遠押因土彦根の人数之内が、
今市鹿沼邊まで、為致出兵、摸撫次第、進擊之
筈も、可有御座就而者、初　朝庭ゝおゝてゝ徳川
氏社稷之儀ハ、被為立置度ゆゝの御趣意之處、
其宗廟を兵乱ゝ掛ゆ儀、恐入ゆ得共、賊徒共擁し
居中ゆ上ハ、周旋難相成御座ゆ、其段御聞置ら下度

御座ハ

四月廿六日

大總督府

参謀衆

東海道總督

参謀

○閏四月三日出五月廿二日着奥州松前より

來信の写

前文畧之、近日當地より京都より、鎮撫使御下向のよし、そもそもこのたび、御待請仕ならびに當地ものほうの物ども、米價案外下直、青魚大漁にて近年ひぼえこれなく、當冬も江戸表も干青魚澤山これあるべく、さてまた當地方此末いかゞ相成ハ哉も難計ハ、ごとく、當時の形勢ハ、日本一あぶなきなる土地与、推察仕ハ、萬一江戸ハ勿論混乱之節ハ何時にても御下向可被成様、御待受申上ハ、云云

右松前来信のうち別段めづらしきもの無之、なれども青魚大漁のよし、干青魚数の子此冬いたくさんたくさんこと、いさゝこの相場の事にかゝる由承しる

○西洋戦時の規定

東のかたにくゆるい兵乱物語るたびに、人命を殺害することあびただしく、まづ戦争の趣意い、かたく秘めきめたることをいんどせしむることをむねとすれば、仁義の道をらうへ殺伐なるようにおもうることそれいまは、むこのようの両國たがひにたのもうそれ、その使者をこころざしとその思いせのゆうにく兵乱のうれ、おもうもとを持ひとぐい決てこころざず、いろいろ社とき出うもとを立てびぎきにゆんずをひいあぎて鍬砲をゆある、白籏い和睦のはたのひのおもてしなれば、又使者めくでるゆく

いもどりとなりたるそのあい、らうへあきて たがひにくしゆり、こりこる碁石を出行ろとかくく打合ゆうに交易を、おもい後日そぼくをそそかくゆるさるまがう支那國などい仁義は邦といひちがふ、そどりまけどりをこころ〳〵、おもいをんなるどをるほうをこころとなり、その仁義の趣意をうく〳〵ちふことはるがぎ〳〵、そもも敵對の時いたがひにその智慧と勇気とをくらべあふゆえに殺害にれるぶるなり、ちのうはあらがばこうくらまたるものをこころをい智勇なく出びたるくとふあるうこめ出らぎなり、ゆえに乱をあく〳〵たる張本なのうでを

殺害せず、その余ろうさんせるものハ身の代金をいたせばゆるし、かつぶしむ、このぎ古ろ紀ハ流罪せ、古賢ハ
こゝにいらく敵餓るゝ紀ハ食を与へ、渇するゝ紀ハ
水をのむ、その意ゝ古ろふ、まこゝろて仁心
なるものハ戦争をなさず、めし、こぎなく兵を抑ゝ
ゝ、このゝゝ仁心をもて主意とすべし

○

ようゝまに在留せるアメリカの平文といふ人ハ
せのひふなるゝ紀名醫なりゝ紀ひとゝの

貧病人をこのゝまゝなるに やまひなきゝ紀れう
ぢをほどこしふせられをるこゝなるも眼病ハ
ゝ紀ぢをしてそのうへにふりまぶるあらゝ
きりふゝ紀仁慈といふべし こゝこゝ紀そひふゝ
ゝしてめのうへのうちのうゝめのまゝる志ゝ紀めの
をとりたるをえしこゝまゝに上手なるものなり

○雑説

近頃佛蘭西にくまのものゝ志、寫真又ハほとゝぎらひ、

に、くさぐのいろを、あり合まにうつすことをくふう
せんさく、さ〜〜ぞさ〜〜くほねをりてかたのめたるもと
をかんごのくいぞせ〜、さまざまそのいろ〜の影象をその
色のまこうろ〜さりたるをえ〜、さりたるのぶくくき所
にこめ物のされべそのいろたちまちきえうせて、ひとふ
えきることいなうず、されどもひとつふたつのいろをと
むることをくふう〜えたうう、その中ゆ青色いりつこも
ふくためうにいきり、こゝ老つにがくしやのそのこぎ
にあひをりたとむるため〜たり、今日本の人いその
ゆゑ欧羅巴の人に物とることなり〜、恥こるにたに

ゆゑ恥ちめいのことにくふうをこふ〜ちこのふをつくさ
ざるや、これをきくたぐユウロッパの武器ちろぞうの
るゐをたこあてこのひめとむるい、いろぐふにこぶくに
のたくのふをついや〜く、人のくふのちこのふをまちのめ
なり、いこうもあちなきよあり、さまざまくふいふまこのげ
ゑにあひをるごとく、めろくのこぎをまるぶにきむ
せうふ、物きてをたてくく、ひとぐをちぎまくこと、その
くふのぐんいちの要まつて、ちこまろづのものぐをえく
いふまり、まそうちこえるたのふあり

○新發明火器之事

歐羅巴ちかごろ先きに先をきりそひべんりなるものを見いだせんとをつとめ、きんねんヒジーア、エ、ギューエ、といふものどもの小銃をくふうせしものを、ユウロッパのいなかぞくまつくつり、なかのまつりプロイス國へ人よさたぐろて先ず右のものどもの小銃をもちひていなかぞくをたのしめしゆゑにいまユウロッパ第一と志ざすぢゐる、されふプロイス慶應二年ヲーストリア國とてのひのきぞくこの小づゝをもつて物ゐひにうちこうちしたゝ、あり、そもより他のくふくそれをまなびて各

發明のことにくふうをこらしものをはじめざるや、そもそもユウロッパの武器鉄砲の類をはじめとして、ひともむるハいろ〳〵にこゝくふ社宝をつゝやして、人のくふのものをまねるものあり、いとしたのぢれなきよるり、されバされふいふ真影繪にかゆをるごとく、めろくのこゝをまるゝぶにもむやうに、ねりてをたてそく、ひとゝをそけますこと、そのくふのだいもの要にして、ちくふうづのものゝをこゝふより、なれうちこえるたのらなり

○

ふらんすの羅尼といえる人ふらんすにて日本人に見せんためひらがなの新聞紙をつくりまりうめのうちさと名づけたり初篇いこの四月朝日の出板ふて十四五日前ふとそなにきこれり二へん三べんも和ひくまきこるべし

○この新聞紙い紙員ふくりあるべ、羅尼の新報中に、なるめづらしきことをもらしぬれば、つづいて次篇ま出板観覧にそのふべし

第十八篇　七月廿八日

○兵庫と大坂の間ふ蒸氣車を造らんとて外國人一人米利加ふ行けり三四ケ月を經ばニーヨロク地名キカイ抑ふび銅鉄を持ちふ着すべし價凡三十万ドルといえり實ふ日本の栄繁なるこの土ふなりまろこそきこゆなり大阪より日本時二分五リンふくく兵庫ふいらっしゃれい平静なる故なり急速ふもるとれい日本一時ふ六十里ゆくといえり荷物ホを運送すべし

○

先ごろアベシニアの戦争に英勢日こに上陸いらこに入こゝにてこのくふいだん國のもの英人大に水に困り渇し居るところ米利賢人一人發明の竜土水をつくりいでこれを地に立てなげきたるところにたちまち水ほとばしいでく英人いとふ物をうべ牛馬ともにいるまぐ水困のうれひなく英勢物ひに勝利をえ〳〵とかへり

○

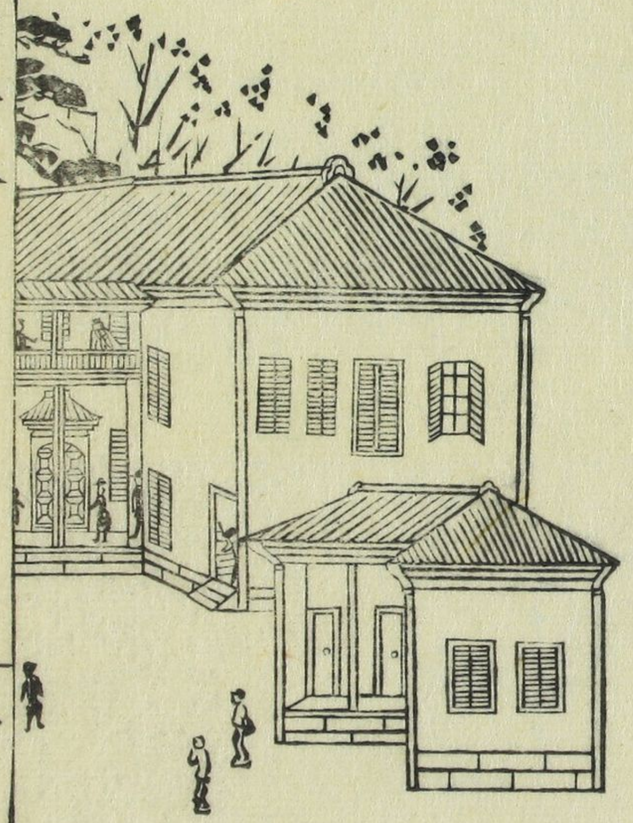
江戸築地ホテル館之圖

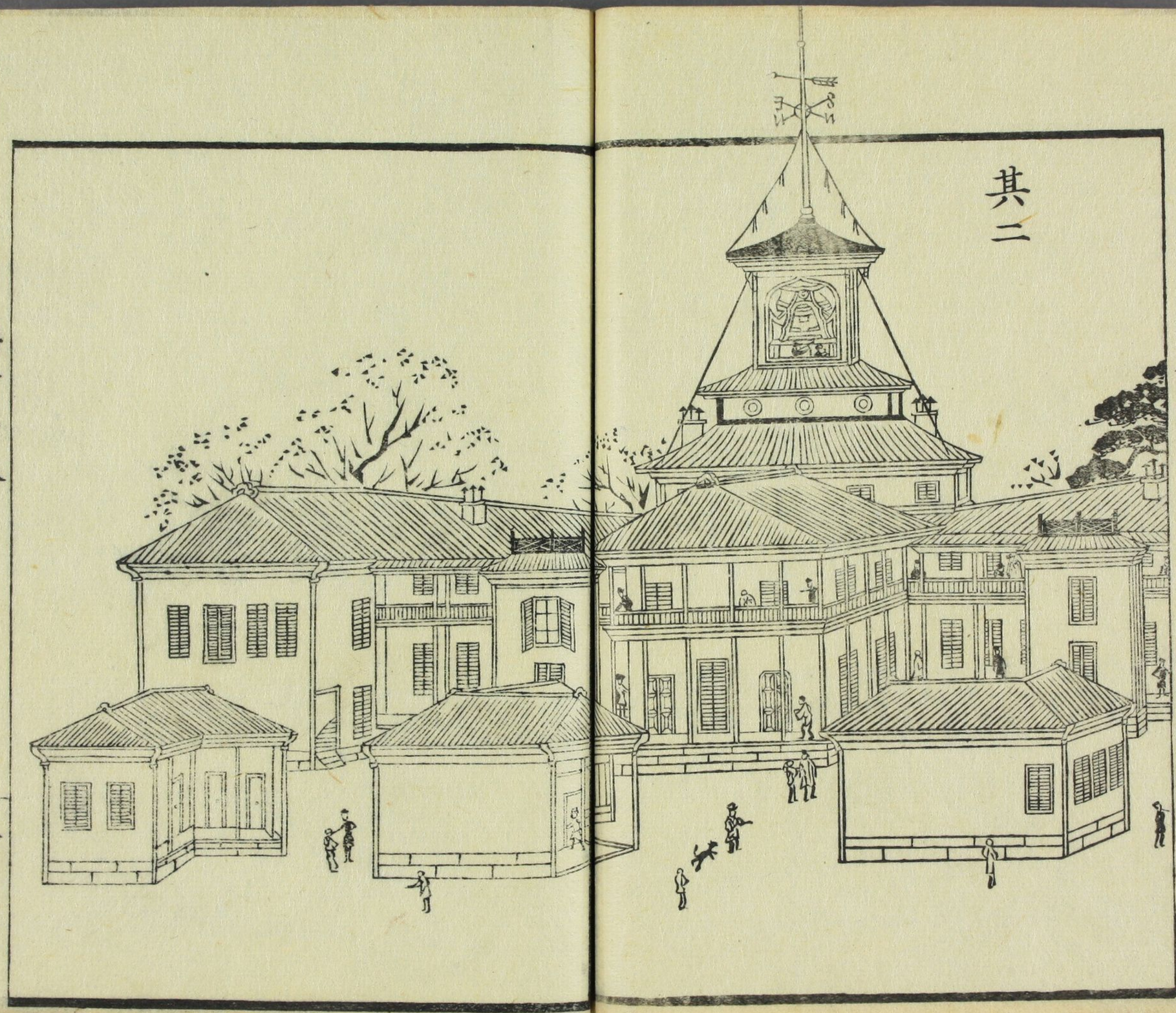
八月中旬發開のよし

間口四十二間　奥行四十間

高　九丈四尺

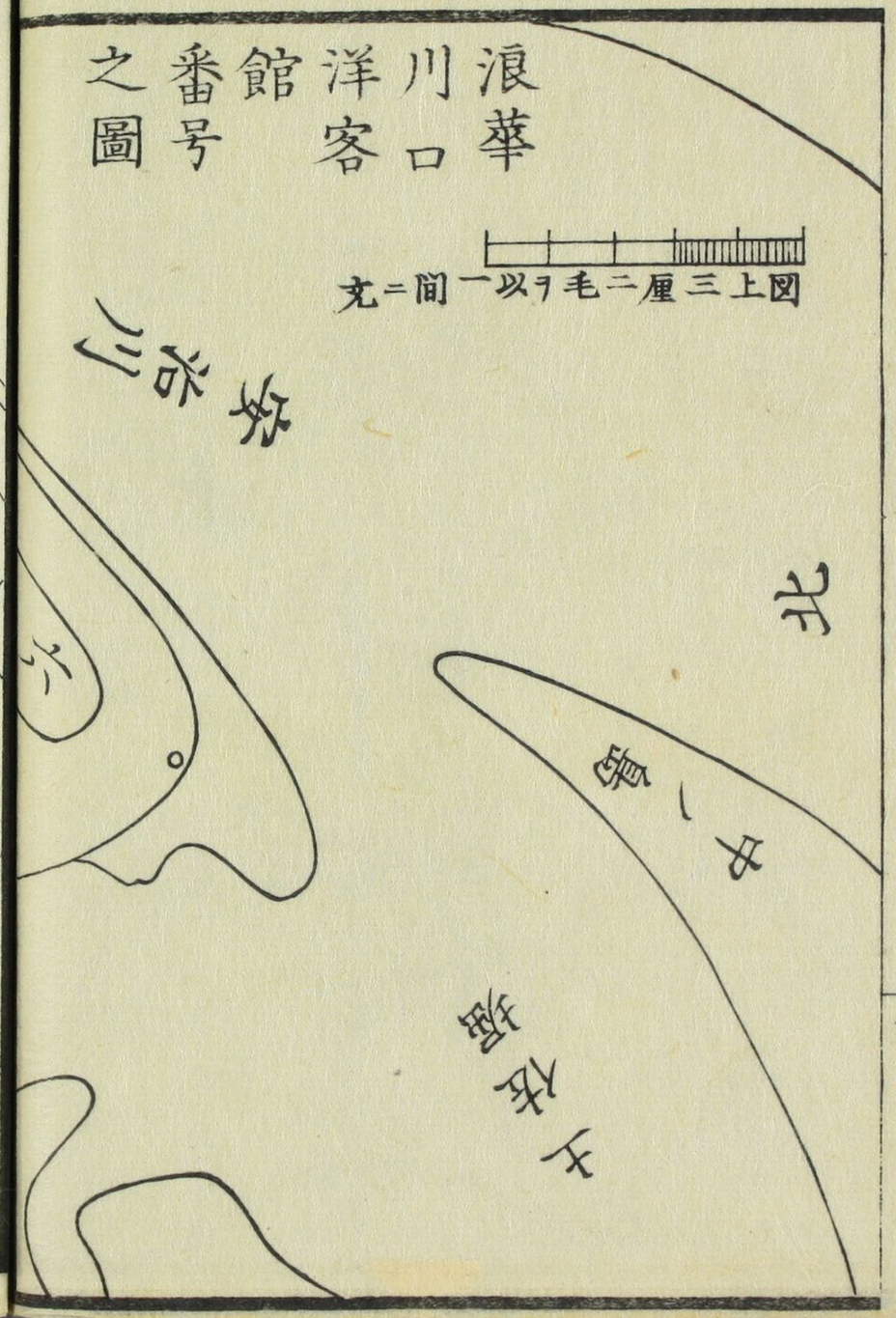
其一

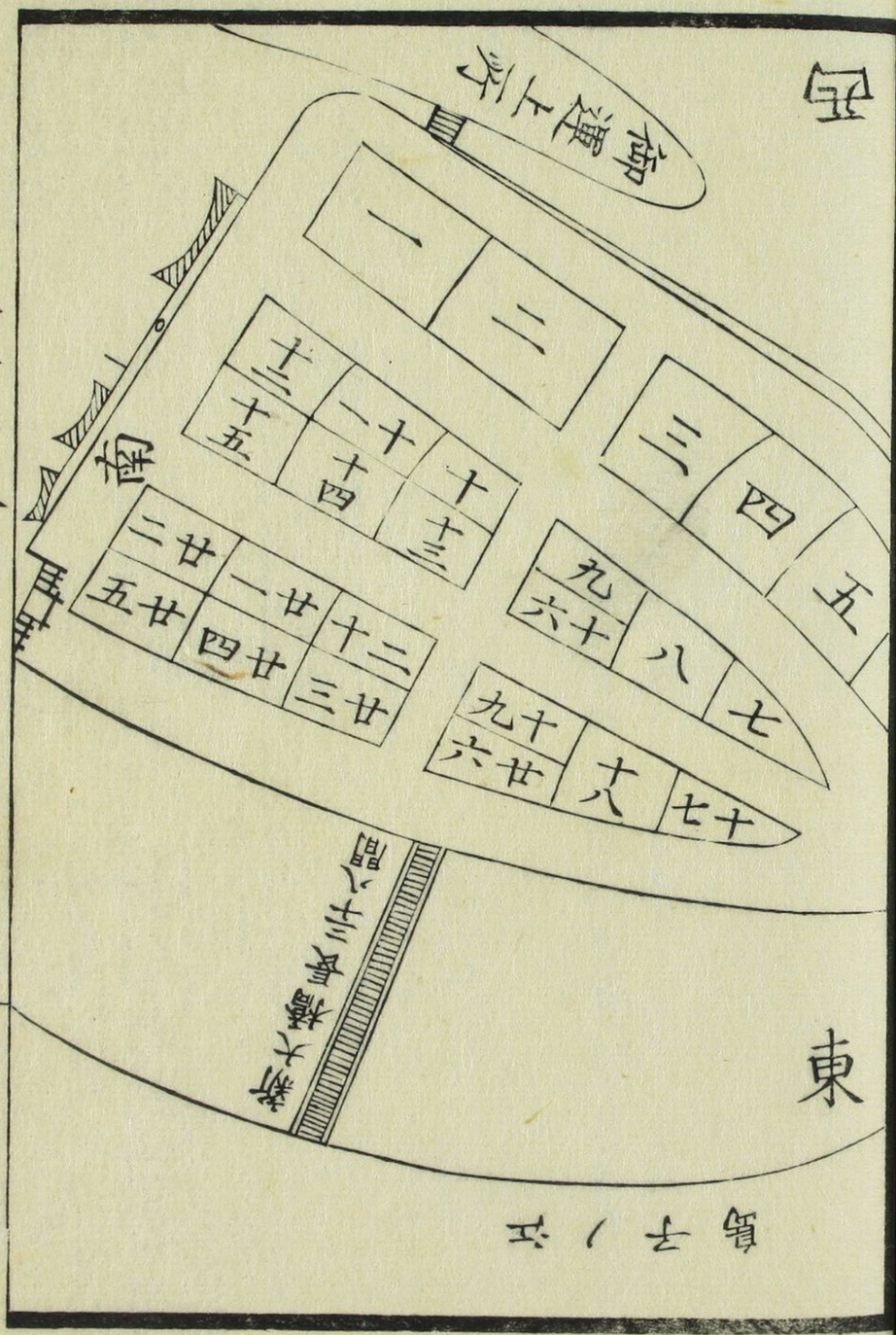



其二

○神戸ゑりきろうしゝ
ぐんじをめ
右ゑぞ九十五
年まへより相ちがまり
當れんいろうしゝく
おりゝろく あひゑりゃい
ゑぐれゝさま かんぞんゆ
▲まづぐんぐんじ
ぐぐきれへくら

浪華洋館川口客番号之圖





○徳川民部太夫殿フランス國御出立相成
當時御帰國のもよにて アメリカ サンフランシスコ
御滞留のうつぶの大飛脚船にて當地へ
御着ふ御案内

第十九篇より引つゞき出板いたすべくあひだ
御高評を希ふ

第十九篇

八月廿五日

奥羽越列藩ゟ外國諸ミニストル江文通之寫
横濱タイムス新聞より抄譯ス但シ原文ハ漢文ニ
ものしたるものなり

奥羽越列藩の軍務總督等謹ゝ外國の領事官に
告ぐ我日本國和親通商のことを定めしより以來海外
各國相共ふ往来〳〵萬里の風濤も平地の如し〳〵貴國と
ねんごろこの車に力をつくし交易の一事のみならず
百般の技藝器械諸術のもの〳〵のこゝろを日を期して待つ
べし〳〵實ふ我國の大幸なりとして奥羽越列藩も

亦大ゐ告ざるを得ざる吏あり謹て案ずるに己ぶ國
徳川氏累世継兼の政權を朝廷ゐ復し奉しまつり
天子御幼冲ゐ渡せらるゝ萬機草創の折あれば奸臣共この隙ゐ
乘じ私意を挾て朝權を擅ゐし下を處の号令至誠
側怛の意より出し事なく專ら殘酷殺伐の威を逞しくして
天下の諸侯を壓服せり天下の諸侯もその凶焔を畏て驅役
せらるゝなれども心中服せざること十ゐ八九なり祖宗神灵
の照鑒せる所天下億兆の切齒する所なれば久しからず
志く元惡誅せらるゝ兄弟和して君臣睦に
いらるゝ事必然の勢なり志のふざれば我國獨り天理なく

人倫なきに至らんとし我奥羽越列藩の君臣上下共ゐこの
有様を洞察し公議を一定し同盟を結び大義を天下ゐ伸べ
強暴ゐ求るをめい之を擊却ぞけ去るのい之を追ひ我國を
維持しく天下聖明の治ゐ至らん事を待のみ海外各國の
諸公使領事官いづれも傍觀熟視ひりて早くこの情を
洞察ひるゐとゆゑりさるども我列藩同盟の心を文字に
托し情實を明白ゐ告げざるを得ざいこんとなれば邪正曲
直の辨明このなりざるうちに奸賊ぞも　王命なりと偽り
順逆を乱さんゐも慮ぞるべなり希くば三ストルゐ
僕輩の至衷を諒察ひりて他なれるゐを知り玉ひ結信締

交のために於てはなはだ大關係なるべく商量をなして唐突を
咎めざる事なるは幸甚なるべん

仙臺藩　　筆名勢負盛景判
米沢藩　　色部長門久長判
會津藩　　梶原平馬景堅判
庄内藩　　石原倉右エ門成知判
長岡藩　　河井繼之助秋義判

○此度普魯西國の注文なる英國の造船場に於て鉄張の大軍艦をうちたてたるこの船は六千頓一頓ハ二千斤ほどある積にて三百斤の元込大砲二十六門をそなへ一ミュートの間に二發宛打方出来一時の間に十里を駛行べし

○支那政府にて世界一統の附合をなす。後レをとらざるべと心掛ケ北京在留の亞米利加ミニストルをたのみ本國の勤を こゝろゝゝめ改て支那の高官中の第一位をいたゝかせて使節とし亞米利加へ法ゝゝたり此人はボルリンゲームと

ふ名あり許多の同勢をひきつれ亞米利加の都華盛頓に着せし處先年日本より來りしる初度の使節同樣の禮義を以て取扱ひしに當節支那政府も開化をところ〻の日本の下ふあるものを甘ぜることなり

○

前の大君の節御雇ふなりしる英佛の士官海陸軍乃教師らも不勤ふなく給料をうける事をなほ〻ばと皆その法をあを斷りしを

○

英國蒸氣船二艘ふ兵士をのりこませ去ル七月二十五日大阪より新潟を向け出帆せり

○

横濱へ米積送を政府ふなくさ〻しに付兵庫より米めの入船一艘もなく米價格外の高直となるまつ然ども ひらくのなりの廻米着船せし處外國交易ふ許さるる港より積來りたる趣を以て陸上げを差留なり此米ハ生糸一同コンミシュルのあづかりとなりしの世ろ運上所と掛合中なり

日本ふく米價いつのもどの高直ふいたるなる柴棍なる南京米ねびしく積廻そべきわべ當冬ハ貧窮人なりしる

飢死の心遣ひいさゝにたゝるべし

○

此節亞米利加の華盛頓近所ゆゑ道具をもちひく川浚をなせりとなり道具ハ蒸氣仕掛ゆゑ深サ二丈幅十丈の堀割をもふき一ニュートふ二千斤の土を堀上る也ゝゝこの道具を大阪の川口ふ仕掛堀上げらるゝ難船のうれひなくなるべし

○

佛蘭西の都巴里ハ總人別凡二百五十萬人なれども巴里生まれのものハ七十三萬四千人たゝ其余ハ日耳曼人白耳義人各三萬四千人ばかりゐづ瑞西人三分一英吉利人九千人其余ハ亞米利加和蘭魯西亞人なり

○

此節日本人多人數横濱ふ來りて住居せるゆゑ近村の借屋貸座敷まで大ふさはりたり外國人もこれふ驚けり

あの人こハ江戸人のなりふぶ他國の人も多く加ハりいづれも妻子老幼をひきつれ來るゆゑ横濱ハ外國の軍艦けいごいかゝて何處ふ戦爭ありるやうふ怪我めきづつひたるきゝをしらるゝ也

○三ヶ月以來横濱の開けこと以前の四倍ふ及べり此有様

にく當冬ふ及び江戸より人別多こるべし　且横濱ふい
外國の兵卒番をなし交易を守る事なれば戰爭なる
時い之をふせぐべし

○運上高凡一ケ月八萬ドルラル以上なるに新政府より日本
人と外國人との附合を自由なるべし　繁昌
いたるべし

○

大阪い繁昌ゆく七月十日より外國の交易をひらくなり
且大阪兵庫八里の間ふ蒸氣車路を取建て半時の内
に往來出來べし　兵庫外國人居留地より一里のうちハ

借屋借地自由なれば此の蒸氣車成就の上い商賣の繁
昌もやがて横濱にいたるべし

外國人日本の國内何処なりとも自由に往來出來らば
金銀銅鉄その外の物産増加なるべき

○

細川紀州尾張の君公東海道より奥州を向け進行せ
るもれの和睦取結の為なり　この風説なり

○

論言一則

兄弟三人にて父の形見の牛十七疋を配分せり　その節昔

りの法あて惣領ハ半分をとり次男ハ三分一末子ハ九分一を
とるべきなり去るにこの牛を分ッかねこのゝ名ぐゝ
で死ぐきにつき遂ふ公沙汰と考まり高官の人こゝに公
事をさゞき右のゝりきまざる一足をこゝ抑紀惣領ハ九足
次男ハ六足末子ハ三足をもちゝいづまる多分のゝりに
當きりさて一足ゝのゝりたりゝゝ之を公ふゝりあぎゝり
かく小利をゝゝそひ抑ゝらぬ人に利を占らるゝとあり
ゝゝもべきなり

八月廿七日

○

亞米利加大道蒸氣車路いゝぐ出來あぐゝさる分
凡六百里ゝどふく右普請入用四千七百万ドルラルの
高を一人あて請負たるアメリカ人ありこれまで一人にて
多分の金高を請負約定せゝのなれぐゝこまゝ程の
大金を一人ゝゝくゝりきゝめゝあるゝめい初てなり

○

當八月十五日ゝり江戸あて外國人の交易ゝゝ
ゝゝ日本政府ゝ日ゝひゝけゝる進ゝて外國人を

あくむ心やとゝれば數年のうちあい全國大ふひらけて
亞米利加 英吉利のごとく世界中に附合ふあらん
外國公使より水野若狭守を以て江戸の奉行とし
交易を司らしめんるをねがひたるうの人を大君
政府の節神奈川奉行を法とあ外國人のためあい
これまでの奉行中あくの第一とるべきるくるにれ
理を弁ぜ人るり

○

外國人のうちあたい今上皇帝近く京師より江戸江
御遷都ありて改めて東京と名けらまべきは果して
ふのうんあい江戸い實ふ日本の大都府とるべ
普魯社のミニストル江るあし無礼の事あり付日本
政府より詫言なるべき旨ミニストルるヤるて且左之
書面を日本人へふまたあされる
去ル廿五日余ご従者普魯西ミニストルの別當を車ム
引下しミニストル江對し不法の所業ふ及べる段余ふ於
甚ご氣の毒ふ存ふ附ちれるの以後ミニストル及び外國
人江對し右様之所業無定様いづまて心附マヤめの也
右之通り東久世少將殿より被仰出ふ間不洩ゆう

觸知らるべきもの也

七月十二日

神奈川
裁判所
印

○

魯西亞の太子は亞米理駕見物もして此節華盛頓府
ゆきあふ色もうつれは近く歐羅巴ふ大戰爭ありべき景
色なれバアメリカとべつぐんふ懇意をむすぶん爲なべし

○

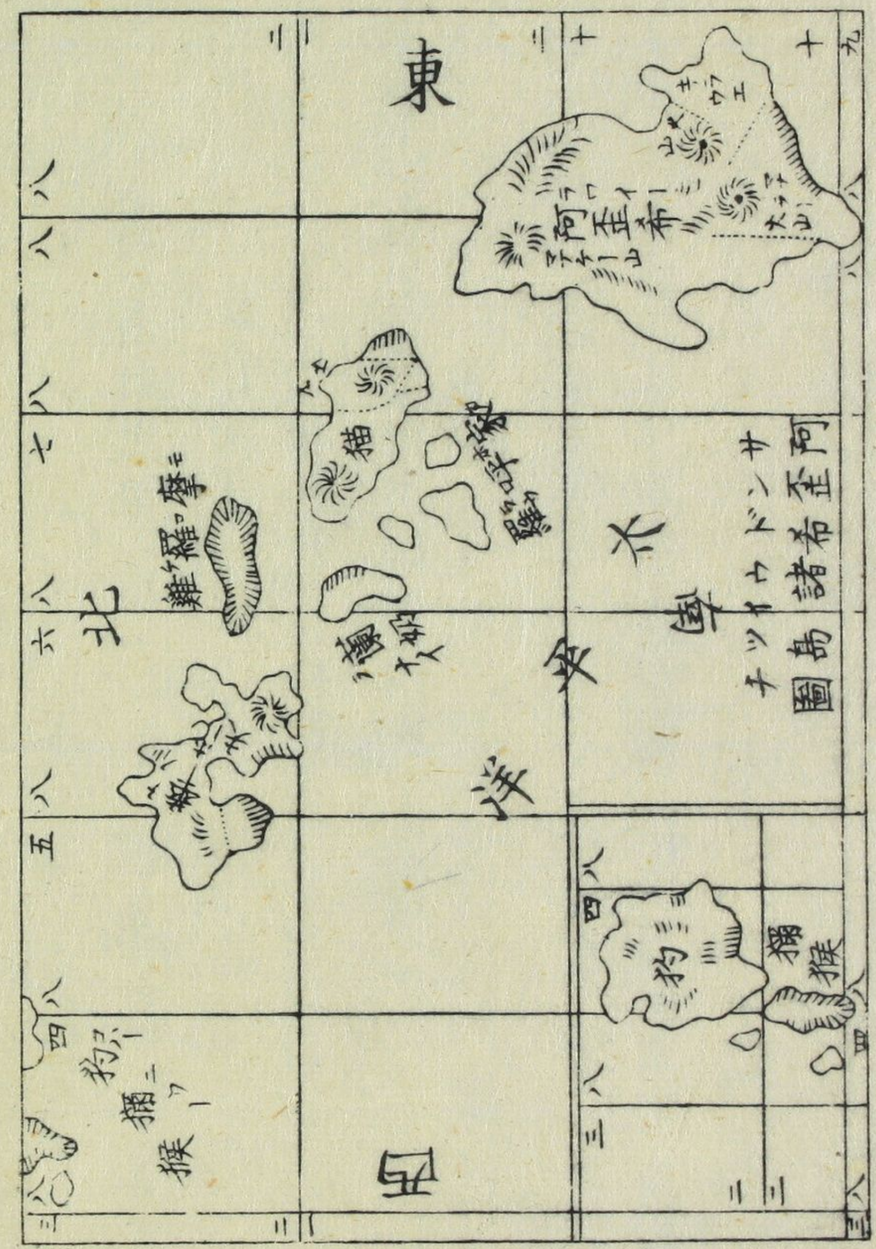
哇希（ハワイ）（俗ニサトウイツチ島ト云）より音信ありて曰先頃日本を出帆
せし雇夫らちは法このなく哇希ふ到着し土人共も
いろ〳〵信切ふ世話いたし上陸の甘ろは雇夫銘〻へ
帽子衣服まとをたつへ食物住宅藥湯の心附もゆき
ゐ三年の後は無難ふて日本へ扨ゆ届べきなれに取
極め且ツ給料は一ケ月洋銀三枚づゝ頭分のものへは五枚
いたしなし何不足なくくらせる趣なり既ふ右の雇夫
取締牧野富三郎より別紙之通の書狀をさしこし
者依て付箋上仕ら扨も私はじめ一同こゝの去四月
廿五日夕刻横濱出帆海へ二十五日和歌山沖羅に
哇希國港下。ホノルヽ。港へ安泊仕ル私中まで迷

手分ケ和茶りマウエ番又ハ「アワイ」「ラナイ」ヲ中
西ハ三十人又ハ十人位ヅヽ茶銭中ハ二朱ハ砂糖製造
ヲ為ス所ヲ探ト云英のコンシュルに茶ヲ渡ス
小づゝの別番と為り或ハ外商人ヲ抱ヘ茶り来ル
ヲ為ス生中ハ茶番ヲ為ス者ハ私丹ニ為ル事ヲ
食料ホこと外丁寧ヲ一回ニ多番向ヲ為ス
き日ヲ為ルものハ為ル〜ハ外ハ極ヲ〜紀探ト
ヲ大悦ヲ為ス
一船中ヲ船番ヲ為ル者ハ酒分ハ為ルヲ
ヲ為ル者ハ小部和吉と中者
ヲ抱ヘヲ紀人抱ヘヲ大病数日月十六日
出帆ヲ二十一日ヲ死去ヲ〜欲数ハ外ヲ者ハ
別乗ヲ〜ハ
一番北ハ酒分熱国ヲ日ヲ大暑ヲ時ハ
番中ハ冷水ハ温湯ヲ為ス
茶木の葉蔵数ヲ中ヲ氷ヲ
ご菓林檎蒲萄桃ヲ幸中和部ハ
ヲ紀ヲ為ス
一番歌ヲ為ル者紀人九器人ヲ生人ハ住来ヲ

人数もいろ〳〵穂高一同く大仕合に相成ども
義兵三日まで延当地一泊致し日本人三人アメ
リカに出帆いたし外国人門の産高仕来
と中人壹人残り居相語らく分ケ置く世話
いたしまされ此ごく高備に遂て仏法
アメリカ醫者リイ先生に委任切に方こそ
病人こゝもいと中くふ及そのみこゝもあるく
清世話致こゝに居候ハヤ
此報告
特書細渡候く当中上致候以上

六月廿七日　　ハワイ國ワフー〻ハワルカ
日本横濱　　牧野家元帥
ウエンリート様
右書状い八月十一日横濱ふ到着せり

一千七百七十八年イギリスの名だたのれふまめ
コーク此島を見いだせり總て島の名をサンドウイッチ
と名づけるこの嶋八箇所あり大凡里方六千一百住民
の数十五万ばかり左の其圖を出せ


東
西
北
太平洋
ハワイ諸島
ヒヤ
ヒヤ
ヒヤ

わこが同胞を失ひたるなげきさよとうきの紀るに傍を
もぎ〜人いこのうまべ君いかくゆきでもうひるべきまのやと
問けるべさわれべとよ口が同胞世ふありしこ紀い物のまこ心
合ぜ愛こさるもそれべいまうひ〜ぶいまい出ら〜さうふ申り
がう〜このうちの人きひて曰く君の同胞いま蘊生らべ
いうふはしまよべまを、さる時い盟て腹黒とし〜待るまし心をつく
てよく交るべ〜あり同胞のこひ「さ」ことなわれべ、そい世ん為紀
ふ愛こ言ふり誠さる心ふらべいま世ふある弟をいつくしと
もうべ〜紀るひもあらべふのさ為をもひらべ世といえり
世ふかるうあ〜少このうべ